近世名家書画談二編

二

近世名家書畫談二編巻之二目次

○畫妙の奇恠ハ寓言なる事
○文字を以て圖畫とせし事
○方西園富嶽を寫せし事
○唐婦尺牘
○伊孚九の名の事
○三酸圖誤りの事
○春畫火災を除るといふ事
○漢土浮世繪師の事
○英一蝶女達磨の圖

長崎藏書

○應挙寫生に妙を得し事
○古を稽へざれバ畫工に杜撰多き事
○第一義施無畏等の額の事
○服元喬畫事
○名工名畫同意の事
○日本扇宋朝にて稱揚せられし事
○賛澤庵と云事
○探幽斎杉戸の畫の事　附賛辞の事
○蕪村翁書畫戯の記
○守景酔興師畫を媟瀆せる事
○宮本武藏畫發明の事
○月舟空に轉合の句を聞く事
○蘆雪魚の印の事
○外國人假名を覚へし事

近世名家書畫談二編巻之二

雲煙子　安西於菟編次

畫妙の奇怪ハ寓言なる事

後漢の劉褒雲漢を畫けるに見る者皆熱しまた北風を画くに見る者皆寒しと又名画記に北齊の楊子華馬を壁間に畫くに夜々蹄齧長鳴を聞となり此類擧て数へがたし皆仙家佛氏の寓言より出たることにして其說に惑ハされ軽々しく信ずべからず　此邦にても亦右に等しき話ありて浅草寺の繪馬夜毎に出て近村の作毛を荒しけるなどの類誠に婦女子を欺く妄談と云

画し王維が輞川図を見て病を愈せるなどの事ハ養神とも
いふべきか又獏の皮に寝て瘟を去り其形を写して邪を
辟るの類ハ厭勝といふものにして絵馬の奇異をさなふる妄
談と混ずべからん

譚子化書云老楓化為羽人自無情而之有情也
賢婦化為貞石自有情而之無情也と是も寓言な
るべし　此邦の松浦佐夜姫の望夫石となりしといふも
此言などより出たることの因に云此比桂川寞臣君が
随筆を見しに浅草絵馬の落款を載て所提筆と
ありと記せり

望夫石の本事ハ劉義慶の幽明録に出るといふ

文字を以て図画とせし事

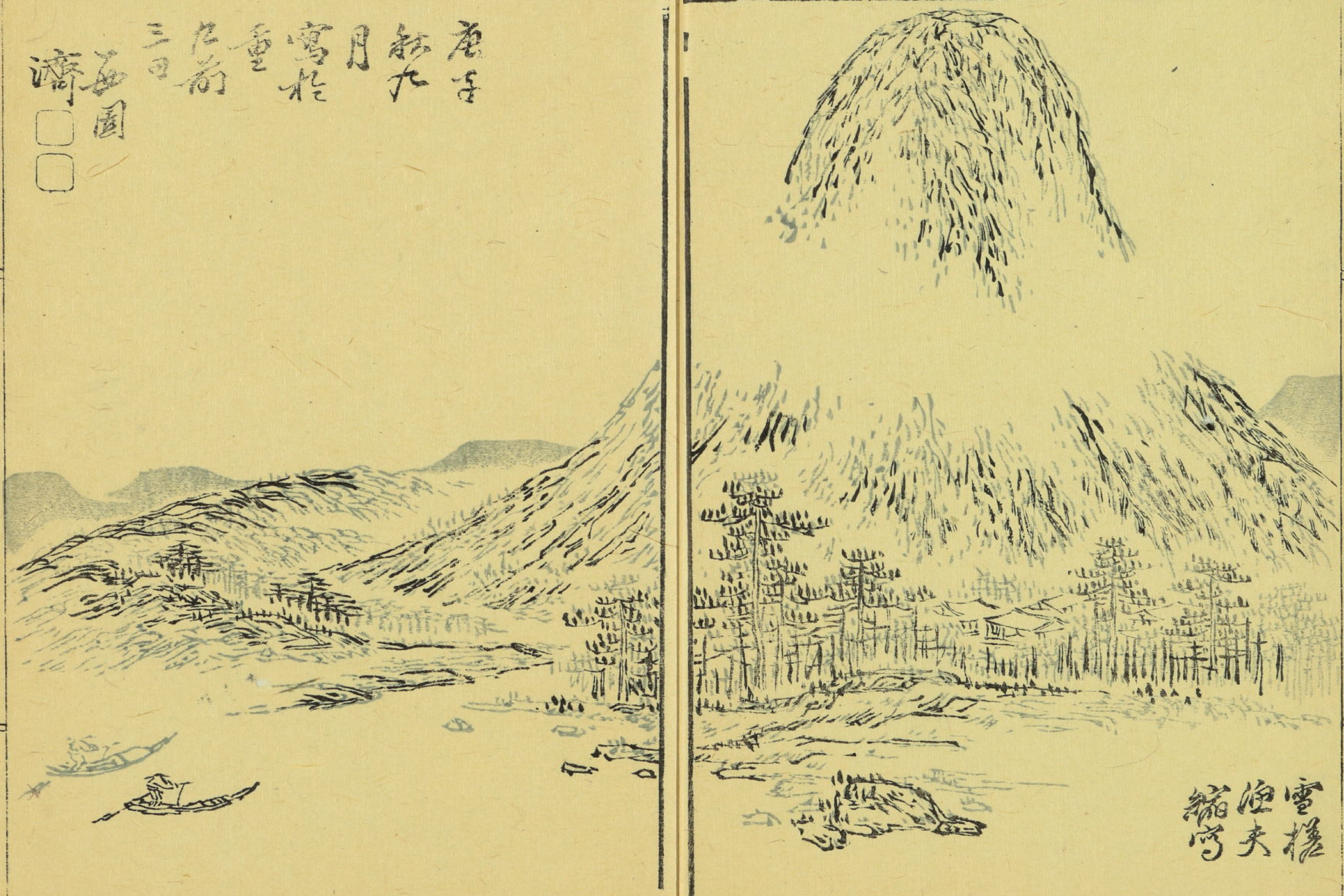
南畝翁説に世に剣に乗せる仙人の図を上利剣といふハ
誤りなり これハ呂純陽の海を渡る像なるべし　詩話
類編に王文恪が純陽渡海の図に題して扇作帆兮剣
作舟と書るよし見ゆれバ純陽なること明かにて列仙
伝の鍾離権とハ大に異なりさまで香祖筆記に陳仲
醇云漂陽人家有鍾離権画花押如一剣状則是神
仙亦有押字とあれバ上利剣の名の誤りハ是より出たる
なるべしと云り按るに二幅対に一僧衣を縫図これを
朝陽と云又一僧月下に誦経のさまを写して是を対

月と云傳へたれどいかなる祖師といふ事を知るものなし
こゝまでハ祖師の名になづみして古人の句を図せしものゝ歟
朝陽補破衲對月了残経と云句なれバなり　此邦にも
和歌の心などを図せしものまゝなり　和漢同意と云なるべき
なり　達磨芦葉に乗ぜしと云も船の事なり詩経國風一葦航之赤壁賦一葦之所如など皆舟を葦と云是又文字也壽老人に蝙蝠と鹿を添て福禄壽の図とせしハ蝠と福鹿と禄の音通なり又鍾馗に蝙蝠をそへしハ降伏の伏と蝠の音通なるべし

方西園冨嶽を寫せし事

理斎帰路日記に云安永の頃にや唐船一艘房州へ漂着せし事ありその比に来商せる唐人ハ猶長崎にいたる者かの漂着せし唐人ハ初て日本の冨士を見て甚よろこびしといふ

彼船に乗渡りし方西園といへる者畫を善せりよつてまのあたり冨士を寫して國に帰りて人々に競て冨士の畫をさり依て今に方西園が冨士ハ人々珍重するなりと云と
理斎ハ唐土へ漂流せし人にて彼国にありて人々の方西園が冨士を賞玩することをまのあたり見たる人なり　此邦にても唐人の図せし彼土の名山勝蹟の図ハ尤愛玩し甚盛ことにこそ　因に云谷寫山が摸せし漂客奇賞図と云一巻あり是方西園房州より崎陽へ護送せらるゝ道路見る所の真景なりよき山水の手本なるべし　近来京畫師在中が画し冨士寫真圖を見しに寶永山を


雪樓漁夫縮寫
庚子秋九月寫於重九前三日 西園濟

見せたり是之東海道西方より望見る處の圖なり東海
道東方江戸より箱根あたりまでにて望見る時ハ彼山
見へざる也ゆゑに富峯景ハ東方より望む所を寫すべきなり
山水四君子圖などにあまり書もぎ多るハ却て画格に入らぬ
棠嗣粲曰富士峯を寫せる者ハ探幽齋が法格に效ばん
バ其清趣ハ得ざらん又常信此真景を翫味せし處
筆墨に默まりたると此二字の圖を賞せし事誠に宜なり

唐婦尺牘

南京の商客崎陽丸山の遊君になじみて帰國遅緩に
なりしかバその婦妻書をよせて諫免なるよし其書翰を

通詞某よりもらひ得て或人に贈るその文に曰く
荷錢貼水。堤柳鳴蜩。遙想
相公與時多福。貴體康泰。為慰。茲啟者。自別以来
倏經四月有餘。家中
翁姑兩大人。玉體全安。無庸掛念也。至于朝夕侍奉左
右。妾雖不才。自當留心。其一切諸務。妾自料理。再
兒輩攻書。雖有先生教誨。然妾亦當日夕勉勵。大
女亦安吉。女婿今春闈得第進士。是為萬幸。但妾
近聞
相公在崎。迷戀煙花。使妾亦為未信。因
相公在家。凡事皆有斟酌。況飄洋渡海。莫不為名

為利。豈反如是耶。妾在家。獨挑寒燈。操持拮据。亦莫不為家業計。乞 相公切不可貪戀閑花。以失素守。千祈三思而行。則家門幸甚。妾書中言語。倘有犯冒。猶祈寛宥為感。餘再叙。專此。須請

近安

言佩相公清鑒

賤妾淑貞歛衽拜 □

六月初七日沖

書袋

内安信一封致

言佩相公台啓

沈門何氏拜書

同裏

六月初七日潤餘堂

和解

荷葉水に浮び堤の柳に鳴蜩なりて遥に思ひやりけり

は元旦の時と共に多福貴體は安康なるらんと思ひ慰

中は態と志免しけれは別後はや四月になりぬ逢は言

内方は両親様は平安にて座遊はしけれは心から嬉

しく候朝夕は側まはりの御奉公我身不才には得共随分

心を尽くし一切の用向手つのる取計ひ猶又子共なとも

学問出精いたし師匠の教訓をは得共吾身も又日夜に

つとめはげみ候は姉娘もいよいよ息才にて智どの事も常

春進士及第になりびなかりきびて誠に萬幸となす為八

此頃ハ飛りけに法元様長崎にて遊君にまよひむつびあひけよし吾身もまてそこハ思ひやられけ法元様屋ど元まで八万のなる事にな指引おハしまし殊に灘にさなよひ海を渡りすよハ名の為利の為にけへハなど左程なるまでのおハしましけりんや吾身ハ宿元まで獨心細き燈をかゝげいとなきこ辛苦いたしけをもしぎこもひのをかりごとこそけへバ法元様谷いつぐらなる色に迷ひ昔の契りをなるがひなきれまじくけ餘くな辭下さましけへバ家門の幸となけ父までも喜言葉そもしやな氣に肖きけ事なき共なるまま強りけへバ示なけ細に八重てや上屋くけ先ハ便りこまをせ法様體[illegible]候

伊孚九の名の事

好古日録に伊海が父嘗て海外に貿易をなせる夜東海洋中にして男子生まると夢見て家に還まへバ男子誠に安産を即感夢の夜なり故に海と名づけ孚九を字とせ享保十一年廿八番の船に乗じて始て長崎に来る延享中にいたり廿餘年の間往来をその寫を書画世上に賞せられ最風韻ありと云

予按るに孚九山水風韻尤妙大雅池翁も此人より南宗に入ることを得りと思へる又四君子なり船来餘人に比せまれバ此邦にいることと稀なり多く伊孚九と

欵字なるものあり或ハ雲水伊人とせしを見ること
あり又桴鳩とせし意を考ふるに論語に道不行乗
桴浮于海とあるによりて名ハ海字ハ桴鳩としたるか
又莘野耕父とせし印を用るハ伊尹の有莘の野に耕
せしと云意によるかいづれにも高上の見と思ハる其
人となりおして知る處し或ハ扇工に名ある由清人
某氏の筆記に見へたり

三酸圖誤りの事

杏園が記に云世に酢吸の三聖の圖とて老子
孔子釋迦の像を畫りて按るに趙孟頫が東坡懿蹟

圖と云ものの一巻あり其中に云東坡黄門魯直と共に佛印
を訪ひし時佛印云吾桃花酢を得たり甚美なりとて
共になめて其眉を顰む時の人称して三酸とも志るまゝ、
東坡山谷佛印をあやまりて老孔釋とはなるべし僧横川が
京華集に三教吸醋圖詩云翁々乞醋到其鄰聲聘忍
酸寒迫身李白題詩妙於畫擧杯邀月影三人然れバ
此頃より誤り来るか 大竹氏家蔵明黄應禎臨寫懿跡圖を見しに此事なし異本ある事もや追て可考
按るに虎溪三笑圖ハ此酸吸に類せし圖なり三笑ハ僧
恵遠陶淵明陸脩静とても三人共に時代不同なるまじくも
後人の作にて取合せしものなるをもつて此類誤りに似て

なかやまうざるあり皆古圖に傍ふて後人の作りしもの多し

春畫火災を除るといふ事

漢書景十三王傳云。畫屋為男女裸交接。置酒請諸父姊妹飲。令仰視画。廣川王子海陽 とあり春畫こゝに權輿するかと覺ゆ青藤山人が路史にある士人篋書甚多し其櫝毎に必春画一冊づゝを置り或人その故を問ふに是火災をよくる厭勝なりと云りとぞ　此邦にて鎧櫃に必春画をいるゝと云こともいつの比より始りしか未考へず又月岡雪鼎が傳に明和中京師火災ありける典舗の倉庫に彼雪鼎が春画あるが為に火を除りしこと見ゆ路史の説によれるにや

漢土浮世繪師の事

五雜俎第七曰。姑蘇有張文元者。最工美人。俗中之神仙也と是　此邦の菱川師宣宮川長春西川祐信などの類なる歟よく人世平生の情態をうつして絶技といふ一家し今世又京師に栄龍江戸に國貞あり師宣長春と異なれどもよく風俗の情態を畫て世の人情を動かすに至りし是又その妙域に入る者にして得がたき伎能なり

此風俗の図ハ浮世繪比巻ニ
ちなミて時世のさまを記そのミ

和漢人物を画く者畫格の高き妙にいたりてハ十なるとかぞふるにいと稀なるまで仇英ハ　此邦の一蝶舜峯ハ此邦の應挙らおのづから姓名の文字の似通るも奇なりといふべし

英一蝶女達磨の圖

題半身美人圖　　解大紳

千般體態百般嬌。不畫全身畫半腰。可恠畫工無識見。動人情處不曾描。

題西施半身像　　李笠翁

半紙天香滿幅温。捧心餘態尚堪撊。丹青不是無完筆。寫到纖腰已斷魂。

世に美人を達磨に畫しハ古の詩などにより画工の工夫にて悟道の意をもて細腰に達磨を畫しことと思ひしに此頃山崎美成が随筆を見しに女達磨といふハ英一蝶が画きはじめしとぞ昔時新吉原中近江屋の抱半太夫と云遊女ありしが後に大傳馬町の商家へ縁付てその家に人々集りて何くれとなきものがたりの序に達磨の九年面壁の話をきこえけるにこの半太夫きゝて九年面壁の坐禅ハ何ほどのことかあるべき遊女の身の上こそ紋日もの日の心づかひに晝夜見世をはることも面壁にかはることなし達磨ハ九年でさへ苦界十年なれバ

達磨よりも悟道すゝりとて笑ひたるとぞ此話を一蝶がきゝてやがて半身の達磨を傾城の顔に画きたるが世上にはやりて扇團扇烟草入などに女達磨といひたるとかや市川白猿その繪の賛に

そこもさんか是こなさんハ誰ぞ　作處生

九年母も粋よりそしはま味かな

とい上句を題したるとぞ又素外が手引草に祇空

九年何苦界十年まなこらうも

と是また面白き句なり何さま英一蝶ハ何事にも穎敏乃才ある人にして世人の氣をとるの早くこゝに心付しにや

應擧寫生に妙を得し事

應擧寫生の工夫其妙を得たることは本朝古今及ぶ者なし去りながら共瀑布登鯉圖を見るに鯉魚瀑布の中にありてハ登ることを得べからず[?]これ登鯉の本意にあらずと云者あり按るに此圖高田敬輔より出て揖取魚彦など専ら画く事なりその登る所ハ本意にハあらねども其應擧が畫く所ハ其工夫の妙なる瀑布の中にして形像生るが如く真に登るが如くに見ゆ應擧もとより登鯉の圖を知らぬにハあらざるなれども[?]共新意を出して寫せしなるらん[?]たとへバ王維が袁安臥雪の宅邊に青々たる芭蕉葉に雪をつもらせしが如き

同日の談なるべし又幽鬼の圖を寫さしにある婢女晩景に
是を見て氣を失ひしこと口碑に傳へありいづれも妙境に
入らざるといふことなし其工夫ハ壮女の死せる者の面相を見て
画き初しと云其真蹟を見るに常の顔面にて眼中に意
あるのみなり又江戸本所押上天羅山真盛寺に應挙が
畫ける地獄變相圖あり筆力精神の妙夢幻のうちに
地獄を見るがごとく筆者ハ冥府に至りて帰りしものかと
疑ふる誠に地獄の寫生なるべし又人物花卉鳥獸蟲魚
に至りても実によく生動の態をつくせり是ぞ能手虚
を作りても又よく実をうつせるものなり韓非子に客有為

齊王畫者。齊王問曰。畫孰最難。者曰犬馬難。曰孰易
者曰鬼神最易。夫犬馬人所知也。旦暮罄於前不可
類之故難。鬼神無形者不罄於前故易之也 外儲說左上 とあり
実に眼前に見る所ハ世俗是を評し上古のことハ學者これを
評も鬼神にいたりてハ見る者なき故圖様定まらざ
れバ其又拙工の手より出るハ看るものの心を悚動するに
いたらず

東坡曰。余嘗論畫以為人禽宮室器用皆有常形。
至於山石竹木水波煙雲雖無常形而有常理常
形之失人皆知之常理之不當雖曉畫者有不知

故凡可以欺世而取名者。必托於無常形者。雖然常形之失止於所失。而不能病其全。若常理之不當則擧廢之矣。以其形之無常。是以其理非高人逸才不能辨。

古抔稽〔ざまハ畫工に杜撰多き事

道家佛説の寓言より圖を作りしなり或ハ能散樂の景抔寫せしなり猩々抔人物に作り張良の龍に騎る類ひ是なり關羽青燈看書圖も今様のとぢ本にかゝるも古昔乃書籍ハ巻物なり魏晋の頃ハ今の佛經の如く折本なり中疊以擧手為率と南史に見ゆ又隋書經籍志に零疊の字あり關羽の看書も折本なるべし今の如きとぢ本にゑ胡蝶装とて宋に始まると云又漢以上の人抔畫くに頭巾幘帽抔服せし圖甚多し是又誤りなり漢以上にハ冠をかりにて頭巾の類ハ無きことゝし　此邦にも源平戦争の圖に鎗ハなる畫ものまで皆長刀をとりあり又兜を右落さまに為る者乃頭にハ烏帽子なるべし　鎗ハ足利家の末より出来たるものなり此類和漢ともにかぞふるにいとまなしぞ

因云孔夫子常に章甫の冠を戴き縫掖の衣抔着玉ふもひし抔魯公儒服なりけれやと問玉ふに答て壯なりし魯に居り長して宋に居けれバ二國の俗に從ひけるとなん

儒者の服とて別にハ無くひとの為ひしとぞ　此邦にも
ことに似ることあり肥後の藪茂二郎先生大坂の中井
竹山先生を始て訪ひし時冬なりしが薄羽織を着し
来り竹山先生怪しみていひけるハ先生にハ夏衣を着る
ことも人と問ひけるに茂二郎先生答へて國許を夏出立
いひしなりとぞ其質朴あて知る可し又云高陽山人の
著せし畫談雜肋といふものはよく画家の謬りなど辨
じあれバ初学の人披覧して益ある可きなり

第一義施無畏等の額字の事

宇治黄檗山第一義の額ハ高泉和尚の筆なり禅師この

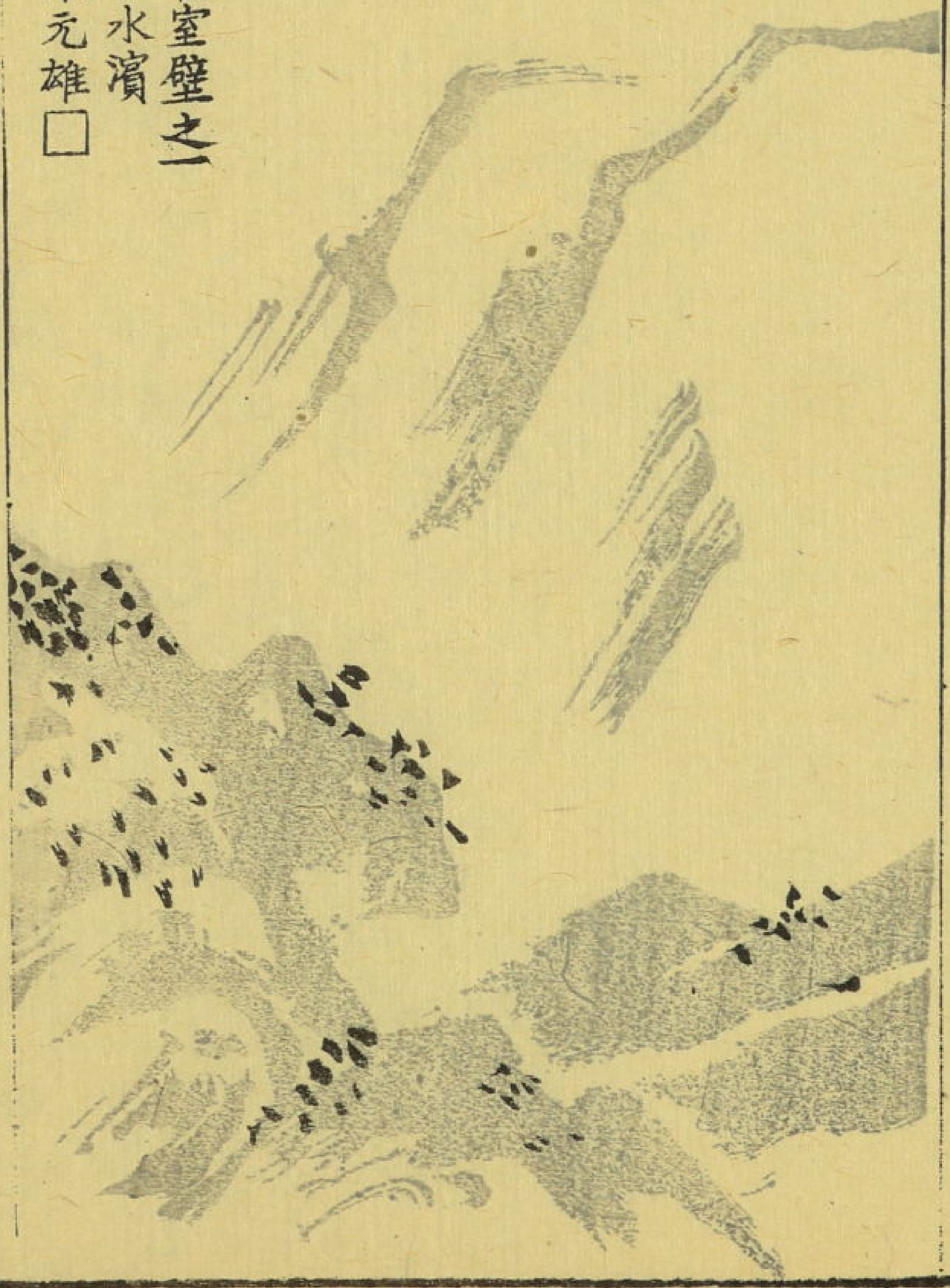
額を揮毫せし時弟子大随和尚傍に見居て是もよし是も
見苦しとて凡八十四枚に及びつる時大随便事に立り高泉
和尚ひとり心に書なやみて大随の居ざる間に筆を放つて
書去しに大随帰り来て大に賞し是ぞ山門を鎮守すべき
ものなりとて手を打て悦しとぞ此額八十五枚目にて成就せしこと
東都浅草観世音堂中正面に掛し施無畏の額ハ高天漪
が書きし處なり是も第一義の額に等しく是ハ何しも
この書ハ見苦しとて書しまで何れも心にかなハざりしを倦こ
つかれて其儘に捨長持のうちへ入置しが其後無程玄
佐病氣づきて卒去せし故門人等長持のうちより見

出して印章を加へ掛けしとぞ其筆妙世人の知る處なり
按るに只書のみにあらず人品も亦勝る故なるべし

服元喬畫事

南郭先生ハ元京師の人なり壯年東都に来りて業矣り
仕へ後徂徠先生の門にいり詩文を以て都下に雷鳴す去れ
ど其画事あることハ門生といへども知らざる者あり按るに
元雪舟流より山水を得られ又花鳥をも見しことあり其
寫せるものに至て稀なり周雪又ハ觀翁と款字せる有り
又無款なるあり秋玉山が服翁墨竹記に周雪の款字乃
事を載せ又湯淺元禎が文會雜記に服子没後其書齋の

南郭先生之画



水也石也尺之寸家君画書室壁之一
其洶涌嶔巖者别求之赤水濵
服元雄□

信州櫻井氏藏

壁に山水の畫ありたるを剥して門生等持去りたることを記せり又毎年六月廿日品川東海寺中少林院にて二三軸を展観す　法橋吾山云南郭ハ山水を好む癖ありたり家に居てハ至る所の風景を手づから壁に畫き是に向て常に愛せられたる又門人肥後の隈本に白脩といへる學士あり元喬卒して後夢に木曽の山中より来たるとて再會し往事を談じ且山川の美をかたりて一絶を唱ふ

危峯四合白雲間。一路崎嶇不可攀。依舊懸崖三百丈。臨泉寺裡老僧閑

此事を書通にて東都に告来る息仲英大に感歎し

風體格調他の人の膓に出ず誠に夫子の靈ならめと會談の次にハ時々語りけるとなりかの晋の羊祜が死しての後もその魂名山に登るべしといひしもある事にこそ臨泉寺を寝覚山と号も木曽路名勝の地なり

名工名畫同意の事

天明のころ金工の名譽ありし長常ハ類ひなき上手なり應挙もまた畫に於て上手なりしが智恩院宮家諸大夫樫田阿波守といへる人長常に小柄を彫りてよ應挙に下繪をかゝせんとありつるにハ長常うけがひあり因て樫田氏應挙に下繪のことをたのみつかはしけれバ速に書ておくりし故即ち

長常のもとに持参して与へけれバ長常いふ此下絵にてさ
得られずといひけりいかなれバと問けれバ我にほらさんとて應
挙ハ画の上手なれバ我彫るかたくせを其儘書たり思き
たがひくせなれバ常に直さんと思ふ其癖を彫らんとするを
いと難き事なり癖を直さんとして自ら久きの不らさるハ
ある道として物語けれバ樫田氏まで上手の妙なるを感じて
小柄を彫ることを止めけるとぞ

日本扇宋朝にて稱揚せられし事

皇朝類苑。風俗雑誌部。曰。熙寧末。余遊相國寺。見賣
日本扇者。琴漆柄。以鵶青紙。如餅。揲為旋風扇。淡粉
畫平遠山水。薄傅以五彩。近岸為寒蘆衰蓼鷗鷺竚
立。景物如八九月間。艤小舟漁人。披蓑釣。其上天末
隠々有微雲飛鳥之状。意思深遠。筆勢精妙。中國之
善畫者或不能也。索價絶高。余時苦貧無以買之。毎
以為恨。其後再訪都市。不復有矣 我朝の書唐山に
稱揚せられしことハ既に諸書にいでゝ世人の知るところなり
按るに熙寧ハ宋の神宗の年号 我朝白河天皇の御時に
是巨勢流か或ハ公家又ハ僧阿闍梨などの畫にてもありなん
是より以来 我朝の書画又乏しからず此一事近世扇面
家と云古書画扇を集る好事君子の為に記るせり

賛澤庵といふ事

大徳寺澤庵和尚ハあまり讃物多き故時の人讃澤庵といひしよし歌ハ烏丸光廣卿に学びて修行の功を積しがある時光廣卿異見にてひらに歌よむことを止められしと禅のいとまぬことなりといひ遣ハされし返事に夢窓有庭之癖雪舟有畫之癖愚有和歌之癖と書て其奥に古歌を

人ごとにひとつの癖ハあるものを我にハ許せ敷島の道

といひやられしかバ是より光廣卿も許して指南しまひしとなり

探幽斎椙戸の畫の事　附賛辞の事

天龍寺塔頭某院の書院椙戸の畫探幽斎の筆と称し李白のミ書て瀑布なし是ハ嵐山今の戸無瀬の瀧に椙戸向ひし也その瀧を李白が見るさまに書たり此院焼て新築となりし後まさしく瀧に椙戸の向ハざるを無念といふべし是にも畫工の多く心あることを志るべしとなり

槐記に云雪舟が枯木の枝に鷺鳥のとまりて觜を直下したる圖に外に河もなし替石禅師の讃に水清魚見とせられたり雪舟が画にハもとより水もなかりしハ魚見えなかりしを然るにかくの如く讃しあるより見ればいかにも澄潭の清潔なるに魚のあらはれたるを鷺の見付たるにかくも違

ざれど讃を書くには心得あるべきことなり拙手の讃は
畫と重言になることを多しと云ふ

右は呼起の賛にして又畫家必此用意あるべきことなり
先古人一圖を命ずるに於て畫外に意の深きことを察す
譬へバ一花片葉といへども卒然画くにあらず先其情態
を思ひ其風致を考へ畫理の變を盡し千万無量の想
を積て一圖を作も是を落想ともいふ也し未だ筆を
揮はざる以前斯のごとし而後繁をぬき要を採て
練熟の手にして易く畫き出せるゆへに匆々意を
経ざるごとく見ゆれども自ら心思獨運趣味厚重

なり方蘭坻曰作畫必先立意以定位置と云ふにて
も知るべし此の枯木白鷺圖のごとき水魚は畫か
ざれども落筆前沙汀覓鮮鱗の工夫雪翁が著
想中に備りある事必定なるべし是なる妙手の
讃語を添て圖を呼起せしものなれバ所謂無聲
詩と称するも物に應じて趣向を求め貯へ就中
風調ある事にて珎禽奇花切近的當にその儘画き
出しあらんとて綵花泥禽にひとしき也詩意に叶ふ
とは云がたく且ことさらに對して妙語の發すべき根跡をも
なかるべし因て名手の真跡にいたりては減筆と繁手

とは論ぜんともに千金に替へがたく益寳賞せらるべきなり

因に云書画像の賛に左向の像ハ賛は左行に書て印は右に押し右向の像ハ賛は常のごとく右行に書て印は左に押すこと多し是ハ朱子文集の内方伯謨に答る書に六先生の賛の書様左右の辨あれバそれ等に據するならんと先達の説あり臨池家などの考へ置べき事にこそ

蕪村翁書畫戯の記

謝蕪村が書画戯の記真蹟は所持せるものあれども尺餘なれバ此書に載する事は得ず故に文をのみこゝに縮寫す

書畫戯之記

我に妻子眷屬無し書畫をもて妻子眷屬とす
我に朋友無し書畫をもて朋友とす
我に金銭無し書畫をもて金銭とす
我に衣服無し書畫をもて衣服とす
我に家なく田地なく山林無し書画をもて家とし田地山林とす
吾遊ぶへきものは書畫交易するその人をもて遊ぶとす

吾に無師古今の名書畫をもて為師と
吾地獄極楽とせしの書畫をも天
地こそことす
平天下の法を守りて價神の像畫
を安置すといへどもあへて我心辭
をもて神佛とす
巻七日而食ハ圖も書画の今
長き日を書畫に
迷ひて十二月

鳳凰都於　東紫雅僊畫

守景酔興師画を媒贖する事

久隅守景号無下斎称半兵衛探幽斎に業を受て名手の誉ある事世人の知る處なり常に豪放にして酒を嗜み時世の俠客の一黨にて放逸又殊に甚しかりし時探幽法印諸侯より三幅對を命ぜられしに常に丹青いと多くして日限に迫まり命のいそぎしかさきに至りて漸にして畫成る中ハ人物左右ハ山水何れも秀潤にしてことに奇絶なり未だ落款に及ばずしてありしを守景一日鯨飲の興に乗じ来りて彼三幅を見て大に感歎やまず手を拍ち奇絶ことよろこび事限なしいつか人の

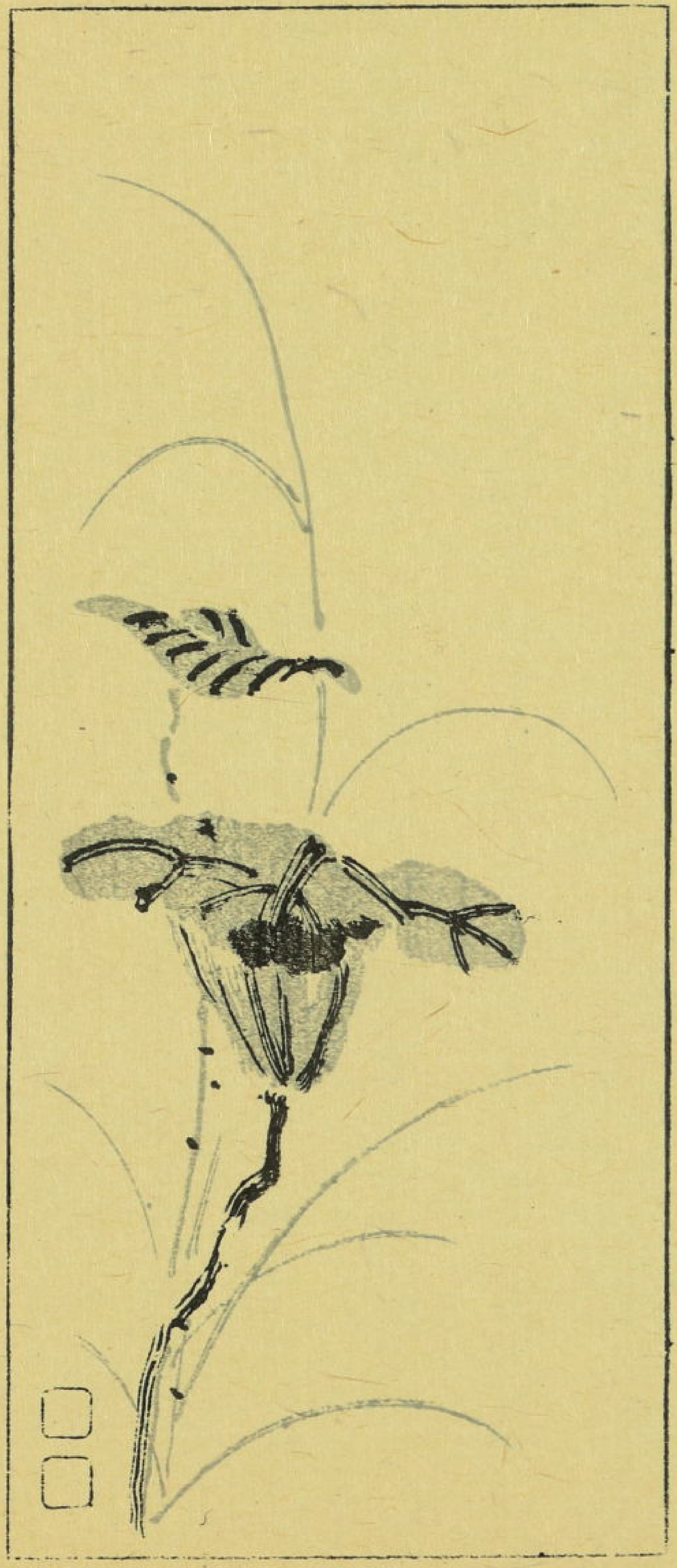
かゝる事を幸として揮筆して其山水の山際より男
根を人頭となし其行列を酔筆してその儘天向に
倒れ臥し鼾雷の如く前後も志らず熟睡なり折節
この侯より催促の使来りしバ日限の延しを乞へ法印
かゝるべしく落款せんと思ひしに守景がかくの如くの様故
大ひにあきれ歎息してやまざりしがよしなく此事を侯に申上
られしかバ侯にも守景が人となりをば知りたまひし故
いかにも其男根の行列を見度よし命ぜしかバ法印やむ
ことを得ず即時に持参せしに更に酔筆の妙灑々落々
として超凡なれバ侯にも大ひに感じたまひ且悦をたまひて

なれど名誉の所為奇なることとかへと伝へ其儘御収
蔵となり今に宝物となれりとぞ

宮本武蔵書画発明の事

宮本武蔵の伝ハ武芸小伝に委しく記せり其余画事を
能せることを知る者なかりしが或時主君より命ありて君
の面前にて達磨を画けるに甚だ拙劣なりしバ其日は止ぬ
武蔵夜に入り寝臥なりけるが夫と工夫して密と夜半に起き
ひとり燈下にて画しに意に適ひて精妙に成りその時
武蔵門人に向て云けるハ我画いまだ刀術に及ばずその故ハ主
君の御前なれバ成ほどよく画んと思ふ心ありしが却て甚

宮本武蔵之畫



拙劣なりし今ハ我兵法を以て畫し故に是ハ適意の作と
そもし我兵術ハ太刀をつとりて立出る時ハ我もなく敵も無
く天地を破る見地なれバ恐るゝ事なし極と画ハ劔道乃
足本にもよれるもと語りたるとなん
按るに武蔵ごとき勇士にても主君の前にてハ臆せし
見えたり是ハ禄あるゆへに明時便殿に人と召して書
を御覧有し事ありけるに上の威に恐まて汗出手顫て
字をなすことを得ざりしに陳復獨り動止安雅にして
書法端正なりしとぞ是武蔵と同日の談なり一友人の語に
人多き處にてハ人なき心にて事をなすべし人なき處

にて八人多きところにて事をなすべしと云へるハ至言といふ
べし

月舟空に轉合の句を聞く事

續畸人傳卍山和尚の條に洞家中興月舟和尚の事を載せ
又こゝに一奇事を聞たる事あり月舟若かりし時遊行して
嵯峨野に日暮たれバとある菴りにやどりを求めしに主ハ
威厳ある老翁なりしが和尚に向ひ禪徒ならバ詩を作る
べし一絶を聞かんと云月舟諾して見まハれに獅子菴と
しる額ありて即時に賦して云

投宿嵯峨獅子菴半盞清燈語江南

として轉合の二案にあらさハも時に主人聲を發して

夜来風雨忽地起紅葉秋成一丁二丁三

と附たり和尚去バし感吟して目をひらき見れバ家も人も
消うせて荻々たる原中にひとり坐したり古の都良香の
羅生門の詩をかける類ひにやと吾山翁が記に見へたりこれハ
月舟が若かりし時なれバ坐禅の外魔の侵しけるにやあらん

蘆雪魚の印の事

長澤蘆雪名魚字氷計淀の藩士なり應挙の門人となり
て毎朝淀より京師四條の應挙が宅へ通ふことゝなりける時
寒氣甚しく通路の小川氷りて魚其中にありて一身とぢられ

て浮游を得ざるごとくうしなひたる形状なり蘆雪是を憐みて
救ひ得させんとあせれども氷中にていかんともすべきよしなく
そのまゝ京に登り應挙が家に在てその暁景帰路にて
見たるかの魚を見しに朝にいたりて氷漸くに解け魚乃自
在を得てよろこべる形ちなりと述べ翌日此事を應挙に語る
應挙が云真に面白き話なり我が畫においてもかくの如く
師に従ひて学ぶこと年あり一生肉艱苦の作行つゝも漸く
氷の解るを得るがごとく今ハ畫の自由を得たりと思ふ也
なり各こゝろ得あるべきぞと蘆雪其意を得てさとりて夫より
より摸寫縮寫の工を積て法式丹青設色の工夫鍛煉し

て俗をさり雅致を得べきこゝろ急なりしぞ遂に名手とハなれり
此故を以て氷の内に魚の字の印を用ひ名とせしとぞや惜むべし
歿し四十歳に足らずして没せる人蘆雪が畫に細密
なるを見ざれバ描ことを得ざるやといふものありて蘆雪が方寸の
内に百鳥を畫きしに真に應挙に劣らざれバとて歎息せし
とぞて又あらる時思ふことをありて師より請ふ受の畫手本を
そのまゝ持参して應挙に見せしに應挙是ハ何のきざしにて
てあらき畫をなし故蘆雪なかくに清畫して再び直しを乞ハ
まはしかバ是よりて益いよいよ進みしとぞ此事によりて破門されしと

外國人假名を覚えし事

清人韓人琉人その外海外諸國の人和歌なども詠じ
事長崎聞見録琉球談紅毛雑話などにも載せて人の
知る處なりここに寛政の初船來せし孟涵九なる者ハ殊
に日本を好みて容體も日本風に作りしとぞ言の葉も能く
和語を覺えて假名をも書くこと精妙なり兎角江戸の地口
とりやそのにことなりき
なるほどに書やこのかな文字より余ハ唐より書や此假名
まるで茶釜に蟹を畫きて
茶釜がちくらにかふとどまりけまん

又琉球人の歌

讀谷山王子朝恒

わたつみの
おきこよりいでく
日のもとをさる
たつれ
こゆるらく

豊見城王子

鏡山

くもりなき御代の鏡の山なれば君が千とせの影もうつれり

伏見の里にて

たれもかくさびしき旅の草枕ひとり寝る夜半の月影

不二の山紙

人とはゞいかにこたへん言の葉も及ばぬふじの雪の白妙

右の餘種ゝ有れどこゝに略しぬ

近世名家書画談二編巻之二畢